

## 魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈

中 川 成 夫

一  
魏志倭人伝に、倭女王卑弥呼の宗女壹与が魏に貢した品目として「白珠五千孔青大句珠二枚異文雜錦二十四」が記されている。

此の語句の読方については諸説があるが、私は橋本増吉博士の所説に従つて「白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十四」と読むこととする。<sup>(1)</sup>

此の品目の内「青大句珠」が考古学の示す当代の遺物の何に当るかについて、諸家の見解は何れも勾玉に比定する点で一致し、その材質について若干の相違が見られる。例えば橋本増吉博士はこれを青瑪瑙(Jasper)―出雲石の大勾玉に比定され、嘗て邪馬台国九州説の一論拠とされた。<sup>(2)</sup>

原田淑人博士は近時硬玉(Jadeit)が国内に産出することより、これを硬玉―翡翠の勾玉とされている。<sup>(3)</sup>

魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈

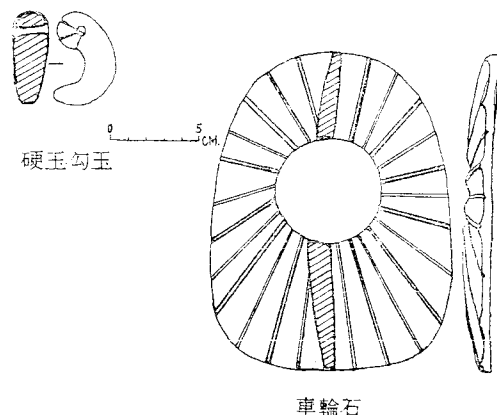
私はこれを図に示したような、車輪石、即ち碧玉製腕飾に比定したいと思う。

二  
車輪石は、石器時代の二枚貝製の腕輪から発達したものであるが、古墳時代の前期から中期にかけて、形を碧玉に移したものが多数作られ、それらの中には、手を通すべき孔が次第に縮小され、非実用的な宝器化したと考えられるものがある。殊に魏以前の鏡と同じく伝世の事実が認められ、また、鏡・武器・硬玉製勾玉などと共に副葬品のセットとして、畿内前期古墳より多く出土し、その時期決定の一つの指標と考えられている。<sup>(4)</sup>

畿内における古墳の出現は、今日三世紀後半にあてられており、九州における出現は、略一世紀近く遅れると考えられている。<sup>(5)</sup>

三世紀後半、或は四世紀初頭における北九州では恐ら

魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈



く、甕棺墓・支石墓・石蓋土墳墓などの弥生式的葬制が行われていたと考えられるが、それらの副葬品には、貝、青銅・ガラス製の実用的腕輪・釧は見られるが、碧玉製腕飾は見られない。<sup>(6)</sup>

原田淑人博士は、車輪石や巻貝を縦断した形より転化した鉄形石は、中国において、戦国時代より漢・六朝にかけて腰間に着装された璧・環の影響を受けた所産であるとされている。<sup>(7)</sup>

### 三

「青大句珠」の文献考証は、橋本増吉博士がその遺著「改訂増補東洋史上より見たる日本上古史研究」で詳論されている。今、その所説を紹介すると

1、「珠」は説文に「珠蚌之陰精也」とあり、通例「玉」が山に産すると解せられるに對し、江海に産するもの、ように解せられる。また「蚌」は説文に「蚌蜃属・爾雅釈魚に「蚌合珠」など見え、淡水産カラスガイ科の貝類に属するようである。

2 然し「珠」が必ずしも江海に産する蚌珠を指すものとは限らず、また真珠のような球形のものゝみを意味していないことは、例えば、王充の論衡卷第二、率性篇に「随侯以藥作珠精躍如真」と見え、また広雅に琉璃・珊

瑚・琥珀も「珠也」としていることから考えられる。

3、「青珠」は辞源に「青珠青琅玕之異名」と記されているように、中国文献上、青琅玕を青珠と呼び、これが青瑪瑙を意味した場合があつた。

4、句は勾の誤字で「青大句珠」は青瑪瑙の大勾玉と解するのが最も妥当である。

5、倭人伝に倭の産物を記し「出真珠青玉」とあるが、この青玉も青瑪瑙を意味し、「白珠、青大句珠」に相應するものと推察される。

これは、拾遺記卷十に「崑崙山傍有瑤台上有琅玕璆琳之玉煎可以為脂」とあり、魏志注所載魏略西戎伝に「大秦多明月珠夜光珠真白珠」とあるに對し、史記卷八十三、鄒陽伝に「臣聞明月之珠夜光之璧以闇投人於道路人無不接刺相問者」とあるように、「玉」「珠」「璧」が文章の上で同義語に用いられた場合もあることが考えられるからである。

6、然し貢物の品種が、邪馬台国が畿内か九州かを決定する資料としての意義は少ない。

というのである。<sup>(8)</sup> 以下この橋本博士の極めて精緻な文献考証を基礎として私見を添えて行くこととする。

### 四

魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈

### 1、勾玉説に対する疑問

前述のように、橋本・原田両博士とも「青大句珠」を勾玉に比定することに一致しておられる。魏志倭人伝の年代に近い頃の勾玉には硬玉・碧玉・ガラス製などがあるが、青色を呈するものは硬玉・碧玉製であり、碧玉は国内に産するが、硬玉は石器時代の垂飾に見られるような白瑛を有する原石は国内で産出するが、古墳時代前期に見られるような深緑色を呈する良質品は舶載のものであろう。<sup>(9)</sup>

三世紀後半―四世紀初頭の両製品は分布は前述のように、硬玉製品は畿内より以西に古墳・甕棺、或は祭祀遺跡などから出土する。碧玉製品も略同様な分布を示すが、九州においては、碧玉製勾玉の出現は古墳の発生と略時期を一にしており、倭人伝記載の年代には少なくとも北九州には未だ出現していない。<sup>(10)</sup>

古墳が畿内に発生したことについては恐らく今日異論はないが、その発生の年代については未だ若干の差が諸家の間に見られる。<sup>(11)</sup>

然し、勾玉も鏡など、共に伝世の事実が認められるところより、倭人伝の時代に少くとも硬玉製勾玉が存在していたと考えられる。<sup>(12)</sup>

## 魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈

八八

従つて、勾玉と見る限り、最も普遍的な三世紀後半に存在したものは硬玉製品であり、若し、邪馬台国の産物と見るとき、九州説の論拠としての碧玉製勾玉は根拠が薄弱といわざるを得ない。<sup>(13)</sup> 即ち、勾玉とする限り、硬玉製とすべきであろう。

さて、硬玉製勾玉は大きさが五種程度が普通で、大きいものでも一〇種を超えない。これに対して、倭人伝の作者が敢えて「大」の字を冠したのは「白珠」に比べて大きいという理由からであろうか。更に、これを数える単位に「枚」をもつてしているのは、「孔」に対する語としてであろうか。

## 2、車輪石を比定する理由

これに対して、車輪石も同じく青色を呈し、形も一〇種以上であり、二〇種前後のものも決して珍らしくない。<sup>(14)</sup>

前述のように此等は鏡などと共に伝世の宝器として書ばれ、かつ畿内前期古墳より多く出土することは、倭人伝の時代に存在していたとして差支ないであろう。

更に「枚」という物を教える単位について考えて見ると、説文には「枚幹也」とあり、段注に「毛伝曰幹曰枚引伸為銜枚之枚為枚数之枚」とあり、本来幹を指したものが、後に数の単位呼称に変わったらしい。その用例を見

ると、倭人伝には「銅鏡百枚」と見え、また、左伝に「以枚數闔」と見えている。闔は門扇である以上の用例より見て、比較的大きく、かつ平たいもの、呼称単位に用いられたと考えられ、これらの点より、勾玉より形も遙かに大形で、かつ扁平である車輪石を数えるにふさわしい呼称ではあるまいか。

次に車輪石の形態について考えてみよう。前述のように二枚貝の貝輪の形を碧玉の上に模したもので、表面に放射状に肋条を刻し、あくまでその祖型を思わせ、全体の形は原田博士も指摘されたように、中国の環壁に近い。<sup>(15)</sup>

恐らくこの實物を見た中国人には、彼等の愛用する璧の類と映じたであろう。然しその表面に刻された貝の肋条を模した文様や、環壁の如く凹形をなさぬ点などより、江海に関係あるものと考えたか、或いは橋本博士も指摘されたように「璧」と「珠」とを同義語に用いたかの何れかの理由より、「青大句珠」と記したのではあるまいか。「句」は「勾」であり、曲つたことを指していることはいうまでもない。更に伝世の宝器的性格を有するこの腕飾の一对は、勾玉よりはるかに貢獻の品にふさわしかったのではあるまいか。

## 五

倭人伝に記す「青大句珠」を当代の考古学的遺物に比定するとき、従来の所説では原田博士の硬玉製勾玉説が最も妥当であり、以上に私が述べた車輪石説はこのようにも解釈出来まいかとの思いつきであり、敢えて固執するものではない。小林行雄氏は前期古墳副葬品において碧玉製腕飾の有無は、魏以後の鏡の有無と関係があり、換言すれば前期古墳には魏代までの鏡のみをもっているものと、魏代以後の鏡や碧玉製腕飾をもっているものの二種があり、前者は邪馬台国の体制を示し、後者は大和朝廷の体制を示していると述べている。<sup>(16)</sup> 更にこの二種の古式に属する前期古墳が畿内に集中的であることは車輪石・鉄形石を含む碧玉製腕飾が、邪馬台国の位置問題にも関係有することを示すものと云えよう。

以上甚だ論旨整わざる愚見を述べ来たが、大方の御教示、御叱正を得れば幸である。

終りに、本稿は昭和三十一年度文部省科学研究助成補助金による研究の一部であることを附言する。

(一九五七・四・二〇)

註(1) 那河通世博士は「白珠五千、孔青大句珠二枚」と訓じ、白鳥遼吉博士は「白珠五千、孔青珠、大白珠二枚」と

説く。倭人伝に「青大句珠」の一誤記

解されている。

(2) 橋本博士は旧著「東洋史上より見たる日本上古史研究」では九州説の一論拠とされたが、改訂増補版では消極的表現をとられている。

(3) 原田淑人「我國の硬玉問題について」考古学雑誌三〇一六

同 右 「車輪石と鉄形石」

聖心女子大学論叢7

(4) 小林行雄「日本考古学概説」一八五頁

同 右 「鉄形石の研究」

日本考古学協会彙報別篇2 昭二九・四

同 右 「前期古墳の遺物に関する一考察」

(5) 日本考古学協会彙報別篇4 昭三〇・四

小林行雄「古墳時代における文化の伝播(下)」史林三三二四 昭二五

樋口隆康「古墳文化に現われた地域社会—九州」日本考古学講座5 昭三〇・七

(6) 原田大六「日本古墳文化」八四頁 昭二九・九

(7) 原田淑人「車輪石と鉄形石」聖心女子大学論叢7

(8) 同書二一、「白珠・青大句珠と生口」

(9) 藤田亮策「長者ヶ原遺跡調査報告」越後研究9

昭三〇・四

(10) 樋口隆康 前掲書

魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈

(11) 斎藤 忠……邪馬台国の位置

古代史談話会編「邪馬台国」所収

(12) 小林行雄 前掲書

弥生文化に伴う硬玉製勾玉は、信濃・大和・出雲・肥前・筑前などの出土例が知られている。

(13) 原田淑人 前掲書

(14) 後藤守一 石製品 考古学講座 所収

(15) 原田淑人 前掲書

(16) 小林行雄 前掲書

付 記

本稿は昨年十一月十一日に行われた、史学会第五十五回人会日本史部会に於ける研究発表の草稿を加筆訂正したものである。研究発表の際、座長坂本太郎博士、及び藤田亮策教授より御教示を得、また駒井和愛博士の御指導を得た。深く謝意を表す次第である。

# 執筆者紹介

清水 博	本学史学科教授
山田 昭次	本学史学科嘱託
村本 竹司	本学史学科大学院
柴 田 亮	立教学院勤務
中川 成夫	昭和三年本学史学科卒業
宮本 馨太郎	本学史学科講師
林 英夫	本学史学科講師